

## 第19回 Kozoom サロン 28 の報告 「老いを寿ぐ」

2022年最初の Kozoom サロン 28 は、お正月にふさわしく「老いを寿ぐ」というテーマで開催できました。意外と難しいテーマでしたが、皆様のご協力で大変実り多いサロンとなりました。

事前のレポートは、清水さんの日本の老いが置かれた姿が時代とともに変化しつつある状況分析と、老いに関する**厳しい姿を、「檜山節考」の映画で紹介されました。**そして「折角の100年人生といえ甘くない。覚悟を決めながら、どう生き抜いていくかという重い課題を突きつけられている。「ぼーと生きている場合でない」と思いながら、生きている限り、生き抜いて行こうと思う米寿の歳である。」との覚悟をのべていただきました。

太田さんからは「老いを科学する＝ジェロントロジーで正しく畏れる」の表題で、まず統計データによって日本が世界の中でも断トツの高齢化先進国であることを示され、その状況の課題を解決するための指針を示す二つの資料「老年学ジェネントロジー」と雑誌ニュートンの「老いの取扱説明書」を教えてくださいました。

今日の KOZOOM サロン 28 では、皆様直面する老いに関する自分の心境を語っていただきました。注目すべき発言は、親を捨てる時代から今は「子を捨てる時代」かもしれないとか、まず身辺整理から始め、終の棲家でなる高齢者サービス付き住宅への転居の準備を語られ方が多かったです。先週この KOZOOM サロン 28 特別編で藤本さん長谷さんの先行体験談が大きな刺激になっていました。また安楽死についてもコメントも出されました。

今日の進行役を務めた野口が締めでこんな思いを語りました。日本は世界に誇る高齢者社会ができつつある。世界に類例のない介護保険制度ができたために「高齢者向けの仕事」が新しい産業となり大きな雇用も生んでいる。その代表である各種の高齢者住宅がジェロントロジーで勧める「Aging in Place」「住み慣れたところで最期を迎える」ことの典型である。安楽死の話も出たが、今それは本人の決意次第で可能だと思う。死期を悟れば、尊厳死の権利を宣言して、点滴や胃ろうなどの人口栄養補給を断ったうえで食を断てば2週間くらいで望みが叶う。実は「檜山節考」はあの時代の安楽死の姿ではなかったか。おばあさんは死期を悟っておそらく食を断つ。そして西方浄土に向きつつ、雪の中で凍死する、これはきっと最高の安楽死だったのかもしれない。

日本は今技術も産業も世界に遅れてしまったが、実は高齢者社会をどう幸福に生き抜くかを実現しつつある先進国なのかもしれない。お互いこの時代活きた老いを寿ぎましょう。



本日の参加者は写真左上から（敬称略）

一段目 藤本勇 石原靖造 野口幹夫 山本健太郎

二段目 清水健二 林田明 中西卓 水谷真次郎

三段目 小豆澤愛美子 長谷聖一郎 西川浩一路 千葉宣嗣

四段目 神美代子 徳山修平 以上 14 名

今回参加されなかった松原さん、伊藤さん、太田さん、野田さん 上島晃子さん 小坂田さんはそれぞれご事情がございましたが、また次回の参加をお待ちしています。

藤本さんのご尽力で今回もビデオ記録ができました。

今回は前編後編の 2 部に収まっています。

前編

<https://www.youtube.com/watch?v=-kYB5ABjte0>

後編

<https://www.youtube.com/watch?v=RodPMYSZsbg>

進行役 野口幹夫